

# 元服曾我

宮増作

ワキ 箱根の別当

シテ 曾我十郎

トモ 従者団三郎

狂言 能力

子方 箱王丸

地は 相模

季は 秋

「打つを限りの秋衣。く。恨みをいつか晴らさん。

「かやうに候ふ者は。曾我の十郎祐成にて候。さても某が親の敵の事。世に隠れなく候へども。敵は猛勢我等は一人の事にて候ふ程に。思ふにかひなく打ち過ぎ候。又弟にて候ふ箱王は。幼少より箱根の御寺に上せ置きて候。あまりに便りなく候ふ程に。彼者を男になし。諸共に本望を達せばやと思ひ。唯今箱根の御寺にと急ぎ候。

「一樹の陰に宿る事も。是れ生々の契りなり。

「同じ井の流れを汲むも。皆前世のかたらひの宿縁なり。深き乳房の海山の。たとへを積る恩徳の。情を思ふ涙の袖。乾す便りをと待つまでの。命を頼むばかりなり。身は露霜の果までも。兄弟ならでは又もなし。急ぎ箱根の寺に上り。箱王殿を男になし。

「父の恨みの涙の。袖をも共に乾すやとて。曾我の

里をぞ立ち出づる。

上歌

「月影は。雪にて明くる箱根山。く。嶺も二つの影添ひて。ほのぐと。うつろふ富士を湖の。波の雪も時知らで。春夏秋をば送れども。いつか思ひの末通る。心ばかりの頼みにや。つれなき命惜しむらん。く。」

シテ詞

「急ぎ候ふ程に。是は早箱根の御寺に着きて候。急ぎ別当の御坊へ参りて。某が罷り登りたる由を申

し候へ。

団三郎

「畏つて候。如何に此御坊へ案内申し候。

能力

「誰にて渡り候ふぞ。

団三郎

「唯今祐成の御登山にて候。其由御申し候へ。

能力

「心得申し候。暫く御待ち候へ。やがて申し入れうずるにて候。如何に申し上げ候。

ワキ詞

「何事ぞ。

能力

「唯今祐成の御登山にて御座候。

ワキ「何と祐成の御登山にてあると申すか。

能力「さん候。

ワキ「やがて御目に懸らうずるにて有るぞ。此方へと申し候へ。

能力「畏つて候。如何に申し候。こなたへ御出であれと申され候。

シテ「心得申し候。

ワキ「や。こなたへ御出で候へ。さて唯今の御登山は何

事にて御入り候ふぞ。

シテ「さん候唯今参る事余の儀にあらず。弟にて候箱王を申し請け。元服せさせん為めに参りて候。

ワキ「何と箱王殿を元服せさせん為めに御出でと候ふや。

シテ「さん候。

ワキ「是は思もよらぬ事を承り候ふものかな。箱王殿の御事は。大方殿より仰せ合はさるゝ子細候へば。

祐成は御存じ有るまじく候。思ひもよらぬ事にて候。

シテ「さん候仰せ尤にて候へども。それは母にて候ふ者の女計らひにて申され候ふべし。唯ひらに祐成に賜はり候へ。

ワキ「いや大方殿御一人にても御座なく候。故河津殿仰せられつる子細も候ふ間。総じて祐成は御いろひ有るまじく候。

シテ「仰せ少しも違はず候。親にて候ふ者の申事はさる事にて候へども去りながら。御心を静めて聞し召され候へ。我等が親の敵の事。あつぱれ討たばやとは存じ候へども。

カ、ル「敵は猛勢力なし。唯別当の御慈悲にて。箱王殿を男になし。父の恨みの敵をも。共に討たせて給ふならば。出家の功德に劣るまじと。

下歌地「かきくどきつゝ申せば。是非の言葉もあらばこそ。

理なりや痛はしやと。別当も列座の人も。殊に袖をしぼりけり。

上歌

「夢の世にながらへて。く。有るもかひなき身の行方。命ぞ限りなる。惜しまずながら存らへて。思ひをいつかは末遂げて。胸の煙も其名をも。富士の嶺に上げて。兄弟が。其亡き跡と弔はれん。く。」

ワキ詞

「祐成にくどき立てられ落涙仕りて候。此上は力及

ばぬ事。別当は早領掌申し候ふさりながら。箱王殿の御心中何とか思し召され候はんずらん。此方へ呼び出だし尋ね申さうずるにて候。

シテ

「かゝる祝着なる事こそ候はね。さらば急いで箱王を此方へ召され候へ。」

ワキ

「心得申し候。如何に能力。箱王殿に此方へ御出であれと申し候へ。」

能力

「畏つて候。」

ワキ「いかに箱王殿。唯今祐成の御登山は余の儀にあらず。箱王殿を男になし申し。本望を達したき由仰せられ候ふ間。愚僧は早領掌申して候ふが。さて御心にはいかゞ思し召され候ふぞ。

箱王「ともかくも師匠の御はからひにてこそ候ふべけれさりながら。我等が親の敵の事。世に隠れなき事ぞかし。

カル「同じ兄弟にて候へば。十郎殿の御身の上。独りに

限らぬ敵ぞかし。たとひ寺にありとても。忘るゝ隙はよもあらじ。ともぐはからひ給ひ候へ。

ワキ「さては箱王殿も同じ御心にて候。如何に祐成。御心を静めて聞し召され候へ。箱王殿生れさせ給ひしとき。故河津殿別当を召され。この子よくは弟子とも定め。悪しくはともかくも別当が計らひたるべしと仰せられし程に。権現の社官別当なれば。箱根をかたどり御名をも。箱王殿と附け申し。

カ、ル 「今元服の折までも。師弟の契約浅からず。

ク、ド、キ 「同じくは出家をも遂げさせ申し。一寺を継がせ申したくは候へども。御身の心もさすがなり。祐成の御事も痛はし。よし俗体になり給ふとも。内には慈悲の心中をなし。外には仁義を宗として。祐成の影身になり給へと。別当自ら酌を取り。

地 「行く末を。祈る師弟や兄弟の。く。情は共に浅からず。深き箱根の海山の。たとへは同じ心にて。

年々月日を迎へても。猶成人を急ぎつる。其かひ有りて今は早。ともに蔭高き。花の若枝ぞめでたき。かくて此日も暮方の。月の盃急ぎつ。

ロ、ン、ギ、シ、テ 「時剋も今は移るなり。暇申して帰らん。

ワ、キ 「花を吹く。嵐につるゝ梅が香を。留めてもいかに有明の。尽きぬぞ名残なりける。

シ、テ 「名残もさぞなあらましの。末頼みある中なれば。

ワ、キ 「又登山も有るべしや。



シテ「さらばといひて兄弟は。」

ワキ「早門前に。」

シテ「出で行けば。」

地「さすがに別当も。年月馴れなじみをば。いつか忘れん其跡を。見やれば伴なひ兄弟は。曾我の里にぞ帰りける。く。」

シテ詞「如何に団三郎。」

団三郎「御前に候。」

シテ「別当の色々仰せられしを涯分申し。箱王を伴なひ帰る事の嬉しさは候。」

団三郎「御淀の如く。近頃目出度き御事にて御座候。」

箱王「如何に申すべき事の候。」

シテ「何事にて候ふぞ。」

箱王「此まゝ故郷へ帰り母御に対面申すならば。定めて元服は叶ふまじきと仰せ候ふべし。唯此路次にて髪をはやして賜はり候へ。」

シテ「実にく是は尤にて候ふ去りながら。元服など、申す事は。聊爾にはなき事にて有るぞとよ。如何に団三郎。箱王こゝにて髪をはやせと申すは如何あるべきぞ。

団三郎「実にく箱王殿の御淀の如く。此まゝにて御歸り候はゞ。定めて大方殿のとかく仰せ候ふべし。こざかしき申事にて候へども。何か苦しう御座候ふべき。目出度う此人宿りにて。そと御ぐしをはや

し申され候へかしと存じ候。

シテ「さては汝も左様に存じ候ふよな。さらば是なる人宿りにてそと髪をはやさうずるにて候。如何に箱王殿かう来り候へ。

サシ「実にや我等程果報つたなき者はよもあらじ。幼くして父を討たせ。其本望をば遂げずして。猶有りがひなき身となりぬ。

箱王「よし／＼それも命を限り。終には恨みを晴るべき

なれば。唯元服こそ嬉しけれど。

二人

「兄弟主従すごくと。」

地

「髪をはやして千代までと。言葉ばかりは祝へども。そゞろにせきあへぬ。涙や心なるらん。」

地クリ

「それ生死の道さまぐにして。輪廻の迷ひ多し。」

因果を離れぬ絆も皆。親子兄弟の宿縁なり。

シテサシ

「実にや人の親の迷ふ事。まことの闇にはあらねども。」

地

「子を思ふ道にはたどると云ふ。雲井の鶴は月影の。」

さやけき空と思へども。これも子をのみ思ひの闇に。声をかはして鳴くとかや。

シテ

「我等は又親の跡に。」

地

「残りて物を思ひの露の。雨とも降り涙とも過ぎ。」

いつかは晴れん心の闇の。

シテ

「名をや埋まん苔の下。」

地

「朽つるは憂き世の袂かな。」

クセ

「龍門原上の土に身はなるとも。屍の跡を思へたゞ。惜しみても惜しむべきは。後名の嘲り。されば大國に。千里を翔る虎は。一毛を惜しんで。吹き来る風を含みて。其身をかへて死すとかや。日本の弓取は。其名を末代の家に惜しみ。一命を軽んずるも。是れ皆明経に。本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理や世の中は。電光朝露石の火の。あるにも有らぬ草の露。消ゆる境は夢なれや。

シテ

「今の我等が有様を。

地

「思ふも憂き命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでと。頼む便や兄弟。主従ともにすごくと。髪をはやして祝言の。言の葉添ふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の陰に。我等を守り給ふらん。如何に能力。祐成に申すべき事の候ひしをはたと失念してある間。追付き申さうずるにて有るぞ。

ワキ詞

汝は先へ行きて。何方まで御出で候ふぞ留め申し候へ。

能力 「畏つて候。

能力 「如何に申し候。別当の是まで御出でにて候。

団三郎 「如何に申し候。別当の是まで御出でにて候。

シテ 「何別当の是まで御出でと申すか。此方へ御入りあれと申し候へ。

団三郎 「畏つて候。急いで此方へ御座候へ。

シテ 「さて是までは何の為に御出で候ふぞ。

ワキ 「さん候是まで参る事余の儀にあらず。箱王殿の御髪を。愚僧はやし申さん為に参りて候。

シテ 「其事にて候。箱王申し候ふは。此まゝ故郷へ帰り候はゞ。母にて候ふ者定めて元服は叶ふまじき由申し候はんずる間。此路次にて髪をはやせと申し候ふほどに。唯今これにて某がはやして候。

ワキ 「それこそ目出度う候へ。いでくゝ元服祝はんとて。

別当に伝はる重代の太刀。伊豆権現の力を添へ。  
思ふ本望遂げ給へと。箱王殿に奉る。

地 「やがて祝ひの御酒一つ。く。すゝめ申せや人々と。

同じく共に円居し。酒宴をこそは始めけれ。

シテ 「咲く頃の。梢時めく折に来て。

地 「烏帽子桜の花を見ん。

ワキ詞 「如何に申し候。是はめでたき折なれば一指御舞ひ候へ。

シテ 「畏つて候。さらばそと舞はうずるにて候。

地 「烏帽子桜の花を見ん。（男舞）

シテワカ 「菊の名の。曾我の昔を思ひ出でゝ。

地 「万代祝ふ心こそあれ。心こそあれく。

シテ 「心言葉は人の情。

地 「心言葉は人の情。

地 「徒に朽ちぬる身は惜しむべし。名は残り有る代の跡の世語り。夢ならば覚めなん。現とも白真弓。

引きは返さじ富士の高嶺に。かならず名を上げて。  
今の世語りと思し召さるべし。是こそ祝ひの酒宴  
の戯ふれ。師弟の情ぞ有難き。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション『謡曲評釈 第五輯』大和田建樹 著